

鶴 帰 る

本田はじめ

妻が死んで、環七沿いのお墓を申込もうとしたら、子供たちが、親の墓は子が建てるものだとして反対した。だから、妻の遺骨は、鹿児島のお墓所に納めてある。一年間は、毎月鹿児島へ墓参りに帰ることにした。

二月、帰鹿した折、ニューズで出水（いづみ）の鶴の第一陣が、北へ翔び発つたと報じた。あわてて翌日、九州新幹線で出水市へ出掛けた。二十五分で着く。

出水は鶴の越冬地として、最近有名になった。一万羽を超える鶴が越冬する。大戦後出来た干拓田が気に入ったらしい。一番多いのが「ナベヅル」で七千羽を超える。つぎが「マナヅル」で三千羽余り。他に「カナダヅル」や「タンチョウ」が、少数派で来ているというが、見付けるのは素人にはむづかしい。

出水駅からは、巡回観光バスが一時おきに出ていて、まず、鶴博物館へ連れて行かれる。見学を了えると、次のバスで越冬の現場「観察所」へ着く。鶴の万声が田面に響き渡る。「観察所」一階の食堂で、うどんを啜りながら、店の主と話していたら、鶴は十月に第一陣がやって来たという。そして、数年ぶりに今年「タンチョウ」が一羽混じって来たんですよという。

どこどこにと訊くと、主も窓ガラス越しに一生懸命探してくれるが仲々見付からない。漸く、「あっ！農道の先の方にはいます。大きいから見えるでしょう。」というが、私には判らない。

そのとき、ロータリークラブの腕章を付けた数人の男たちが、バケツをぶら下げて、柵の中へ入って行った。北へ帰るツルたちへ、体力をつけさせるため、冷凍いわしをこ馳走するんだという。人が近付くとツルたちは、ぱつと四、五メートル飛び上ってよける。一瞬飛び上がったグループの先に、まさに丹頂鶴がいた。一度、農道から田面へ降りたが、また農道へ歩いて行く。「やっ！見えた！見えたよ。」という主（あるじ）も「良かった。良かった。」と喜んでくれた。「あの丹頂は、他の鶴より遅れて、十一月に来たんですよ。」という。まるで十一月に他界した妻の生まれ変わりのような気がして、立去り難く、いつまでも眺めていた。

殿しんがりの鶴も降り立ち暮れてをり

はじめ

（平成一七年五月記）

環七〓東京環状七号道路

環六〓山手通り

環五〓明治通り